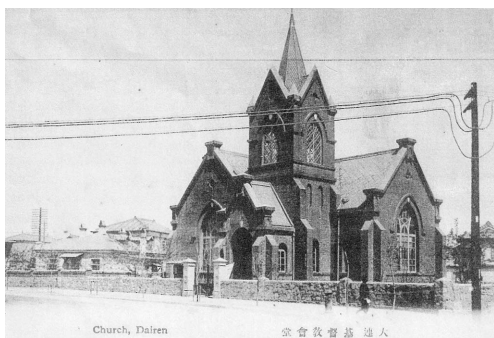


## 満洲の歓楽街－エロスと規律権力：近代日本のカフェ文化（5）\*

山 路 勝 彦\*\*

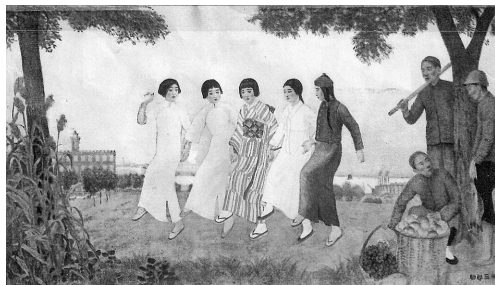
満洲（現：中国東北地区）と一括される地域は多民族が集住する世界である。ツングース系のオロチョン族、アルタイ系のモンゴル族、これらに加え清王朝を建国した女真（満洲）族が古くから生活圏を築いてきた。清朝期には大量の漢族移民が流入し、20世紀になると革命によって亡命を余儀なくされたロシア人が住みつくようになる。ロシア人はハルビン（哈爾濱）などの都市建築に着手し、現在の大都市の礎を築き上げた。さらにキリスト教の一派、東方正教会が布教のための拠点としたため、今もなおその壮大な寺院のたたずまいを見ることができる（第1図）。そのほかにもロシア風の文化を伝承していて、独自の生活文化も維持し続けてきた。一方、日本もまた、20世紀初期の日露戦争後、満洲に権益を確保すると、大挙して移民を送り出していく。大連やハルビンなどの大都市では、こうして多数の民族が住みつくことになる。日本人について言えば、日露戦争後には戦績ツアーが数多く企画され、観光客が訪れるようになり、満洲ブームと言えるほどの活況を作り上げた。



第1図 絵葉書「大連基督協会」

とりわけ昭和期になると、満洲は日本国家の生命線と考えられるようになり、政治的・軍事的に深い関係を持つまでになっていく。昭和6（1931）年の満洲事変、翌7年の満洲国建国という激変する歴史を日本人は背負うことになった。こうした一連の歴史的イベントを背景として満洲へ渡った日本人は数知れず、その目的も多種多様であった。

満洲国建国時には国家的戦略目標として「五族協和」、すなわち日本人、朝鮮人、漢人、満洲人、モンゴル人の五族の協和が理念として唱えられ、また「大アジア主義」が理念として唱導され、「大東亜共栄圏」構想が切実な思想史的課題として語られてきた。第2図に見るような絵葉書や宣伝ポスターやが大量に製作され、今日では貴重な歴史的資料として活用され、当時の状況を理解するのに役立てられている（貴志2010）。他方で、古くから満洲国の歴史上の特異性は多くの議論を呼び込んできた。とりわけ、昭和史を語る際、これらの事情を汲んで政治思想史の分野では昭和史は重要な研究課題となり、現在に至るまで研究は続けられている。なかでも山室信一『キメラ：満



第2図 絵葉書「五族協和」の宣伝

\*キーワード：満洲、歓楽街、連鎖街、社交ダンス、カフェ、キャバレー、裸踊り、エロス、規律権力、浄化運動

\*\*関西学院大学名誉教授

洲国の肖像』（1993年、中公新書）は秀逸な文献である。その副題にあるように山室の課題は、「満洲国の肖像を描くこと」を目的にしていた。1932年に成立した満洲国は建国の理念として「民族協和」、「王道楽土」を掲げていたが、それとは裏腹に内実には民族差別を伴う「兵営国家」であったと説きつつ、ギリシャ神話に登場する怪物、「頭が獅子、胴が羊、尾が龍」という怪物、キメラになぞらえて満洲国の性格規定を下した（山室 1993: 16）。

政治思想史を専門とする山室の議論は周到である。その議論は尊重するにしても、山室は、この昭和初期の時代には人々が西欧的文物に驚嘆の眼差しを向けていた事実を議論の枠組みから外している。大連、哈爾濱（ハルビン）などの大都市ではハリウッド映画が人気を獲得し、巷では洋装化が脚光を浴び、日本の化粧品が羨望的になっていて、移住した日本人以外にも現地に古くから住む人々の日常生活に大きな影響を及ぼしていたことは疑いがない。これらの近代的な風物の流行には日本人が大いに関わっていたことは確かである。この西欧文化の浸透にどこまで漢人、あるいは満洲人が享受していたのか、正確な情報に欠ける憾みはあるが、満洲の昭和期の歴史を論じる際、この方面からの議論は避けて通れない。もちろん、満洲国に住むそれぞれの民族は独自の伝統文化を維持し、持ち伝えてきた。それと同時に日本経由の欧米文化が流入し、ここに異種混淆した、あるいはハイブリット化した生活文化が生まれてきた事実は無視できない。

これらに加えて、生田美智子も重要な論点を指摘していることを書き加えておかねばならない。昭和8年から19年にわたって出版された定期刊行写真誌、『満洲グラフ』を題材に、そこに描かれた女たちに焦点を絞り、国策にも謳われた「王道楽土」の世界にメスをいれることに生田の関心が注がれている。生田に従えば、満洲を特徴づける性格は「辺境性」と「越境性」である（生田 2015: 2）。ロシアにとっては辺境地であり、中国から見ても辺境であり、日本にとっては「外地」であった。けれども、辺境地であることはかえって理想郷の建設に人々を向かわせる結果を導いた。その一例は、「満洲女塾」の語りに見ること

ができる。それは、日本の国策として、あるいは満洲開拓の名において、昭和15年以降、大陸に渡った花嫁たちの語りであった（杉山 1996）。国策として組織された満洲開拓団が活動するや、女性にも任務が与えられ、「女子興亜運動」の一環として創出されたのが「開拓女塾」である。勤労奉仕隊という任務が名目としてあったが、もちろん開拓団員の花嫁候補としての役割も負わせられていた。

こうした複雑な歴史的背景をもつ満洲は、理解するのに一筋縄ではない。国策を背景とした活動は規律的世界の頑強さを誇示していたが、その反面、様々な局面で国策との軋轢や矛盾も生じていた。例えば、カフェや女給をめぐる世界、とりわけエロスの世界では事情は複雑に絡み合っていた。こうした民衆史、もしくは人類学的研究は、政治史のうえではあまり論じられることはなかった側面を浮かび上がらせてくれる。山室や生田は議論の枠外にいていたが、台湾と同じく、1930年頃に満洲にも浸透しかけていた欧米文化について考慮していたならば、満洲での生活史について、さらなる議論の発展が促されたと思う。この側面は、満洲の当時の実像を知るうえでは重要な課題である。

このことを反省したうえで、今まで筆者が論じてきた研究を振り返ってみよう。初めの論考では大阪・道頓堀の「美人座」を取り上げた。このカフェは、大げさに言えば多額納税者として日本の資本主義を支えてきた夜の盛り場の主役であった。前回は台湾をテーマにして議論してきた。その主題はカフェ文化であって、その枠組みを得るために植民地と近代化を主題にした展望を描いてきた。簡単に言えば、洋風、あるいはアメリカの消費文化が受容されていく状況を論述したものであったし、とりわけカフェやキャバレー、ダンスホールの記述が中心であった。では、満洲ではどう位置づけたらよいのであろうか。筆者の問題関心はまさにここにある。カフェに見る、あるいは歓楽街に現れた近代消費社会の生態を記述することにある。以下は、その議論である。

## 1 大連の景観

### (1) ロシアの風情

明治・大正期、満洲を訪れた日本人は、その玄関口の大連に到着した時、西欧的な雰囲気漂わせる市中の光景を見て、異国情緒を感じたようである。夏目漱石もその一人であった。大連に到着後の間もない頃、漱石は、仲間と一緒に夜の電燈の灯る広い道を歩いていると、「日本橋」と命名された橋に行き着いた。その時、漱石は満洲のなかにヨーロッパの存在を見ていて、感激にむせてしまう。その名称からすれば、東京・銀座の日本橋を連想させるし、建築様式からして両者は双生児だと思わせるが、漱石にとってはヨーロッパの大都市に劣らぬ雅な姿と映った。西欧を思わせる光景に我を忘れ、漱石は思わず口をついてしまう(夏目〈藤井編〉(2016: 25))。

名は日本橋だけれどもその実は純然たる洋式で、しかも欧州の中心でなければ見られそうもない程に、雅にも丈夫にも出来ている。



a)

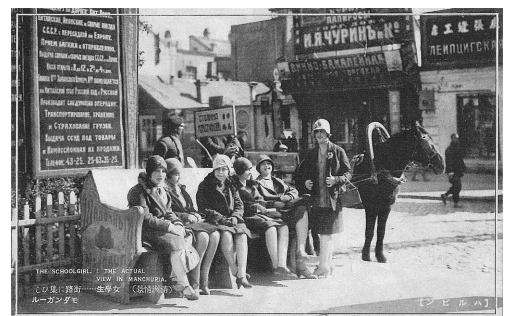


b)

第3図 絵葉書「大連 日本橋」

- a) 「壮麗無比、大連日本橋と其の附近」とある。  
b) 夏目漱石は、東京・銀座の「日本橋」(b)を重ね合わせていたようだ。

大連、そしてハルビンなど満洲の大都市にはヨーロッパ風の建造物が数多く築き上げられてきた。それは大連やハルビンなどの大都市がロシア人によって創建され、多くのロシア人が住みつけた結果、ロシア風の街並みが再現されたからである(第4図)。同時にロシア人は多くの生活文化を持ち込んだ。『満洲日報』は昭和7年12月1日から14日まで、「大連のプロムナード」と題した連載記事を掲載している。一口漫画の形式をかり、大連の生活文化を戯画風に表現した内容で、当時の大連市居住のロシア人の娯楽文化の一端を垣間見せている。大連がいかにロシア文化と縁があったのか、知る手掛かりになりそうである。そのうちの2枚、カフェを題材とした夜の歓楽街に関わる漫画記事を紹介してみよう(第5図)。社交ダンスに興じる挿絵である。時の推移とともに日本人経営のカフェもしだいに増えていったが、後に見る理由で公安当局に営業が規制されていたのに対して、ロシア人のカフェ、あるいはキャバレーの規制は相対的に緩かった。



a)



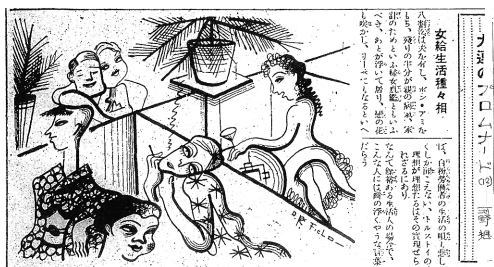
b)

第4図 ハルビンの光景

- a) 絵葉書「ハルビンのモダンガール」(戦前)  
b) 絵葉書「夜の哈爾濱(殷賑なる十字路)」  
a) b) とともにロシア人が主役である。



a)



b)

第5図 大連のダンスホールとカフェ

『満洲日報』は連載記事を組んで大連の夜の社交界を紹介している。

a) 「エロティック時代」と称し、ロシア人のダンスホールを紹介している。

出典：『満洲日報』、昭和7年12月11日。

b) 「女給生活種々相」と小見出しを付け、ロシア人のカフェを描いている。

出典：『満洲日報』、昭和7年12月14日。

## (2) 日本人商店街の発展

大連は、日本統治の開始期では、日本人の人口は1万人にも満たなかったのに、昭和元年末には7万7千人ほどに達していて（井上謙三郎 1936: 16）、短期間のうちにかなりの人口増加が見られた。この時の大連市の総人口は約20万人であったから、全体では38パーセントの比率を占めるまでになっていたことになる。この人口増加の主要原因は、もちろん移住民が押し寄せてきた結果による。

この人口増加を背景にして、大連の統治機構はいくたの変遷を辿ることになる。軍政から民政へと移行し「関東都督府」を設置したのは明治39年、ついで大正8年には「関東庁」を設置し、行政改革を進行させていく。港湾都市として誕生した大連は、さらに南満洲鉄道会社の創立とともに、市街整備が計画され、道路造成、上水道設備の事業などが進捗され、新興都市としての容貌が

整えられていった。そのなかでも著しい発展は商店街の建設に見ることができる。最初にこれに関する状況を述べることにしよう。

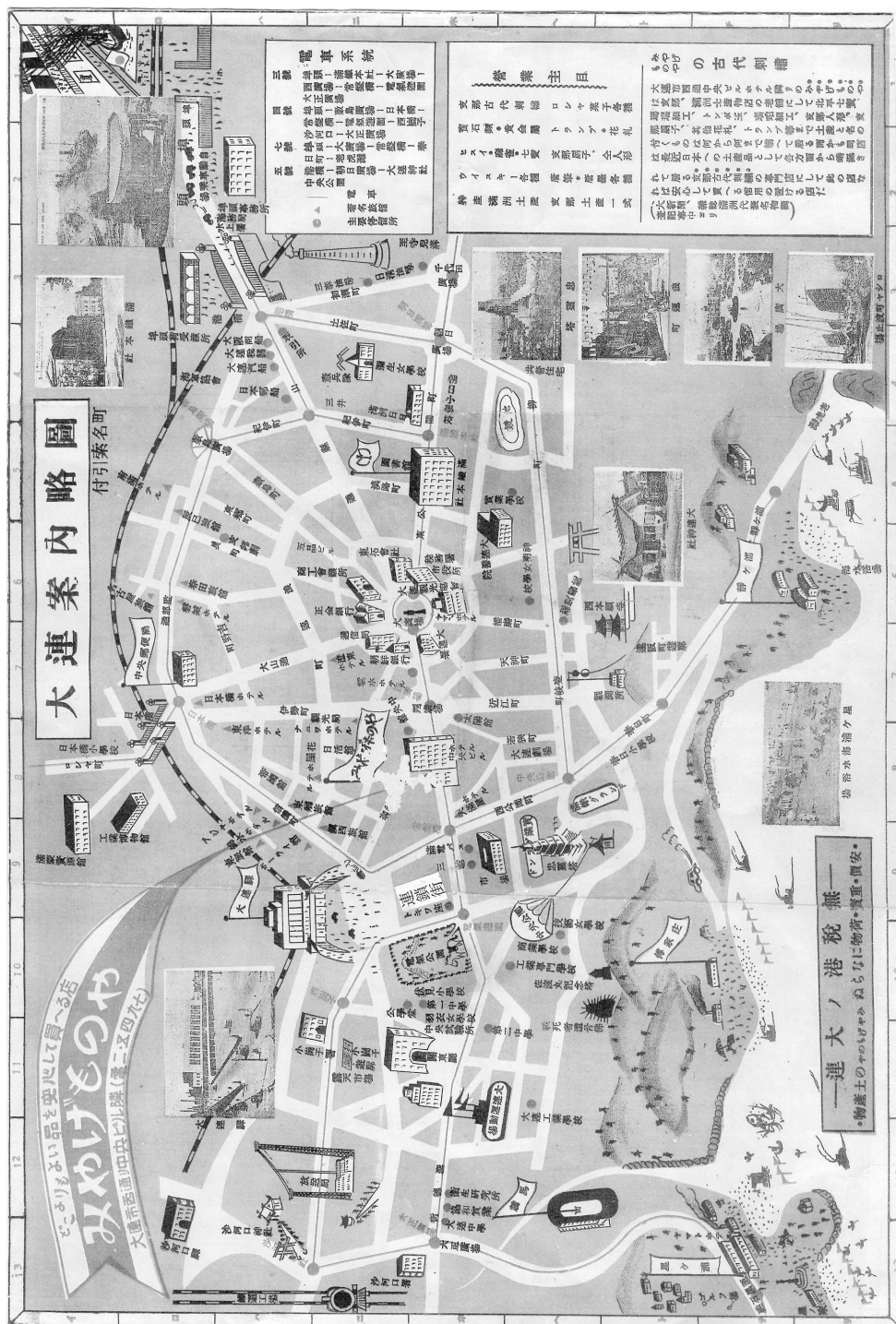
昭和11年、大連の商店街の歴史を語り合う座談会が開催されたことがある。出席者は浪速洋行、近江洋行、大谷商店、鈴木呉服店など洋装店の店主が中心で、当時の花形産業であった洋品店関係者が多かったが、その他に売薬関係者、茶店舗なども参加していた。大連市の商店街の歴史を回顧談形式で語る座談会では、興味深い思い出話が飛びかっていた。それは、明治30年代へ遡る時代の話であった。鈴木呉服店を経営していた鈴木兼重の発言からは当時の様子がはっきりと浮んでくる（井上謙三郎 1936: 868）。

僕が吉野町で三十九年に呉服屋を開いた時、店に棚を吊って持って来た行李の中に品物を入れそれを棚の上に載せたものだ。四十年の九月に三越が出張所を開いて初めて戸棚を二本持って来た。僕も負けぬ気で戸棚を二本内地より求めたが、之が呉服屋の陳列の初めてあらう。

ここに語られた光景は、日本各地でも一般的に見られた普通の呉服店を思わせる。それ以外の商店も、日本の街角で見ると同じように、家族経営の細々とした店舗で構成されていた。まるで行商による商売か、あるいは個人経営の商店を連想させる光景が見られ、零細的な商店が連なっている光景が目につく。もちろん大連の市内には中国人の個人経営の店舗が建ち並び、往路を行きかう人たちが街路を賑わせていた。ところが、日本人の顧客が徐々に増加していった昭和期になると、大連は姿を変え、おおいに商都としての趣きを増していく（第6図）。

20万人の人口をもつ大連市は、行政的に数多くの地区に分かれ、日本統治時代にはそれぞれの地区は日本で一般的な名称、例えば吉野町、山縣通、逢坂町、伊勢町などの名称で呼ばれていた。それぞれの地区には多様な商店が立ち並んでいたのだが、仔細に街角の状況を眺めてみれば、地区ごとに特徴を見ることができる。特定の地区に注目してみると、民族ごとに住み分けられている光





第6図 大連案内略図

この図は大連市の土産店、「みやげもの屋」が宣伝用に作成した観光地図で、正確な位置情報は伝えていないが、大連市内の観光名所を紹介している便利である。この地図では、大連駅（中央左）の前面に「連鎖街」が記入されている（ただし文字を鮮明にするため、筆者が補正している）。その横に「トキワ荘」の名称、さらに近隣には「電気公園」も記されている。

出典：著者不詳 1938 「大連案内図」、大連：みやげものや。

第1表 「民族別営業状況」(大連市)

	物品販売業			紹介周旋業			金融保険業			接客業			遊戯竝に興行に関する業		
	日	満	外	日	満	外	日	満	外	日	満	外	日	満	外
若狭町	69	11		5			4			3			19	3	
吉野町	24	12		2		1	2	2		2			27	3	
山県通	192	13	24	23		1			1	1	1		16	2	4
羽衣町	80	40		2			1						14		
西通	52	3	2	3			10			2			34	2	1
西公園町	39	3		4			6			1			13		
浪速町	78	47	1	3			2	3		2			45	3	
連鎖街常葉町	75			1						24			2		
連鎖街栄町	34	5	4				30			7			2		
東山町	1	42						5						18	
東郷町	5	16	1	1	2					4	2				
千代田町	7	26			1		7				29				
但馬町	37	5		2			1						8		
寺兒溝		19												3	
信濃町	55	4					2			2			71	4	
敷島町	33	11	5	11	5			1		4	2		3		
紀伊町	31	5					4	1					4	1	
春日町	7	5		1			3			18	2		1		
監部町	14	58		1	3			4		6	17		2		
逢坂町	4	11			1			2		83					
近江町	15	30		3	1					9	3		3		
岩代町	20	6			1					22	4		4		
磐城町	55	16		3	1					38	4		4		
伊勢町	77	15	2	3			1	1		21			3		
浅間町	2	31						2			7				
淡路町	22	7	1	2	1					4	2			2	

この表での「日」は日本人、「満」は満洲国民、「外」はロシア人か、中華民国人。なお、表に見る街路名称は、第6図の観光地図と照合すれば、位置関係が分かる。

出典：出井 1942『関東州に於ける営業分布に関する調査』(折込図表)、大連：大連商工会議所。

景が見出される。いや正確に言えば、特定の地区には専門的な小売店が集中し、しかも特定の民族による営業に偏している事実が浮んでくる。その事実を確認するために、第1表の「民族別営業状況」を取り上げてみたい。それは、「物品販売業」「紹介周旋業」「金融保険業」「接客業」「遊戯竝に興行に関する業」を指標にとって、それぞれの地区社会に住む民族、「日」(日本人)、「満」(満洲人)、「外」(ロシア人など)の営業戸数を数値化した表である。

この表から分かる顕著な特徴は、それぞれの地域には特定の民族が住み込み、特定職種の営業を構えていたという集住形態である。いわば民族ごとの住み分けが明瞭であった、と指摘することができる。顕著な例で言えば、山縣通には「物品販売業」を経営する日本人が多いということ、逢坂町には日本人のみが接客業に従事し、監部町は満洲人が多数を占め、物品販売業や接客業を営んでいたことである。千代田町には満洲人のみが接客業が営んでいるのに対し、連鎖街では日本人のみ

であって、両者は対照的な姿を見せている。連鎖街は洋品店が多く、後で見るように洋装化の世界が広がっていて、特色ある地区の景観を見せていた。全体的に言えば、「物品販売業」にはかなりの満洲人が参入しているが、「遊戯竝に興行に関する業」は圧倒的に多くの経営者が日本人だった、ということである。衣服のように日常生活に必須な商品になれば、「物品販売業」はすべての住民に関わってこようが、カフェなどのサービス業では言葉の壁があつて、民族ごとの分離現象が生み出されやすいことを語っている。第1表で見る限り、興行施設への進出は圧倒的に日本人が多い。興行については経営者のもつ資本、あるいは人脈に多くを負っている業界であつて、この偏差の実態は大連市の特徴を表していると言える。

### (3) 連鎖街：洋風化の商店街

『日本経済新聞』(令和3年3月21日)は、「よみがえる大連日本人街」と題した記事を掲載している。大連市の一区画には、戦前日本人が建設し



第7図 絵葉書「連鎖商店街の全容」

た「連鎖街」と呼ばれる商業区があり、商業施設として大連の経済活動の中心を担ってきた歴史への評価が下されている。現在では老朽化が進んでいるので、その建築物の修復・維持に努めることにしたという内容の紹介である。この施設群を大連市当局は「歴史的文化遺産」と認めたのである。それではいかにして連鎖街が歴史的文化遺産とまで評価されたのであろうか。

地理的には大連駅に隣接して位置した場所にある連鎖街は数多くの店舗が連鎖状に連なった商店街である。それぞれの店舗は独立して営業をするが、一つの巨大な建物のなかにそれぞれの商店が連鎖状的に結合していて、実質的には百貨店の形態をなしている。言い換えると、日本で普通に見られる百貨店が高層建築の形態をとるのに対して、多種多様な業種の商店が、横並びに連なった低層の建築形態なのである。この建築物のなかには各種の商店が配置されている。縦に伸びる高層建築の百貨店と違い、その違いを強調すれば、水平的に展開しているという特徴がある。したがって高さでも3階建にすぎず、2、3階は居住空間に当て、商業施設は1階に配置する構造になっているのが、その特徴である。その商店群は通路に沿っているので、顧客は各商店のショーウィンドウを歩きながら覗き、楽しみながら散策することができた。商店が連鎖しているということで、その形態の特徴から連鎖街（あるいは連鎖商店街）と呼ばれるのであるが、大連市にはこの種の形態をした商店街が昭和期に日本人の設計によって造



第8図 「連鎖商店御案内」の小冊子（表紙）

この小冊子には連鎖街商店の成立事情も書かれている。ロシア人と思われる通行人が印象的である。

出典：清水編 1929。

られていた<sup>1)</sup>。

まずは、その歴史を辿ることから始めよう。この連鎖街の商店は、工事の遅れから初期の予定にわずかに遅れはしたものの、昭和4年暮れに部分的に開業し（『満洲日報』昭和4年12月15日）、翌春に全面的に営業を始めている。その開業は大連市の商業界にとって画期的な出来事であった。当時の新聞は開店前から大々的に宣伝を行い、「大連商店街に革命来！」という見出し記事を掲げ、副題には「街頭にジャズは流る」と、前景景を煽っていた。大連の近代消費文明は、以後、ここが中核になって展開していったとみてよい。その記事を読んでみよう。

モダン日本の消費文化の雰囲気は、恐ろしいスピードを以て大連の上空に瀰漫して来た近代生活の美の渦巻といふか次から次へと地上を飾っていく華美な建築様式は何れを見ても消費都市、モダン大連の立体的近景だ（『満洲日報』、昭和4年11月18日）。

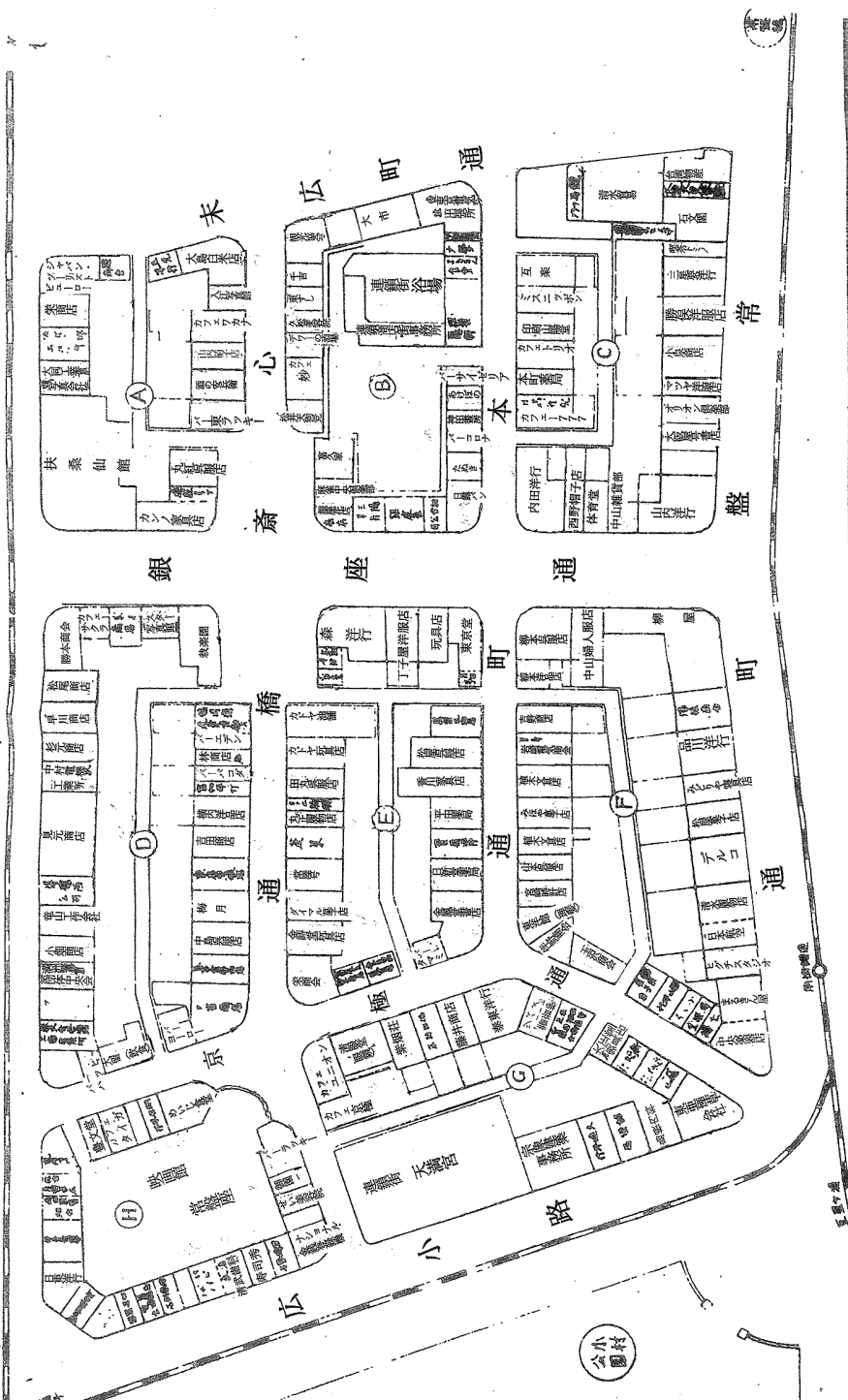
この高揚感にあふれた文章は、近代的消費文化の登場を讀える宣言文であった。実際にその光景

1) 連鎖街を紹介した文献は少なくない。次の文献を読むことができる。

渡辺昭夫 2001「連鎖街と商店街：徳州写真で見える大連」『the 座』43: 18-19。

秦源治・劉健輝・仲万美子 2018『大連とところどころ：画像でたどる帝国のフロンティア』、京都：晃洋書房。

# 大連連鎖街圖



第9図「大連連鎖街図」  
連鎖街の内部は小道が縦横に走り、商店が縦横に並んでいる。原図は文字がかすれているので、判読できる範囲内で筆者が清書した。  
出典：成富 1944。

は魅力的である。その明るさと華美さを商店街の事務所は自慢して、こう言っている。東京人の享楽が銀ブラであるなら、大阪人の享楽は「心ブラ（心斎橋漫步）」にある（第8図）。ならば、大連はと、勢い込んで次のように宣言する（清水編1929: 9）。

小売商店の美しく飾られたウインドウと、軽い疲れと、軽い食欲のための品のいい食堂、カフェー、パーラー……これこそ都会人の要求する買物街であります。そしてわが大連連鎖商店街は完全に其条件に叶って居ります。

近代的な容貌のモダン都市としての大連。パンフレット（第8図）の表紙を飾る人物は、おそらくロシア人のようにも見えるが、着衣からして垢抜けしている。商店街を行きかう人びとは、東京や大阪に比べても遜色のない消費文化を謳歌して

いたはずで、実際にショウウインドウの飾り立ては眩くほどに輝いていた。この連鎖商店街の内側を見て廻ろう。その内部は八個の独立したブロックで構成されていて、ブロック間には「銀座通」などと名付けられた道路が交錯し、それぞれのブロックには洋品店、食堂、カフェ、バー、玩具屋、菓子店、写真館、家具店、文具店などが店舗を構えていた（第9図参照）。さらに、その一画には映画館、「常盤座」があって、娯楽施設も兼ね備えていた。この連鎖商店街の外部には広い公園もあって、その一角にはダンスホール「ペロケ」があり、さらに「電気遊園」と称されるレジャーランドも控えていた。メリーゴーランドなど子どもたちの遊戯施設も兼ね備えていた（第10図）。

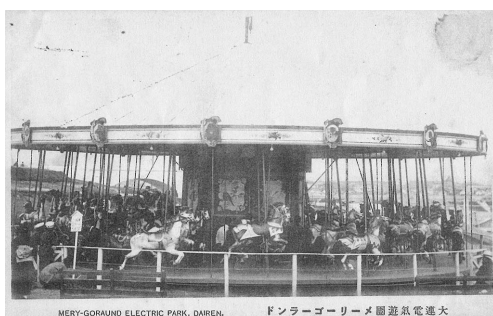
連鎖街の内部は整然としていて、数本の路地が走り、路地に面して商店が立ち並んでいた。この連鎖商店街が幕を開けた当初に開店していた商店



a)



b)



c)



d)

#### 第10図 絵葉書「大連電気遊園」

この電気遊園は大連連鎖街に近接して設立された。子ども向けの遊技場でもあった。

- a) 「大連電気遊園地の景」
- b) 「大連電気遊園の夜景」
- c) 「大連電気遊園メリーゴーランド」
- d) 「大連公園之虎」（檻の中に虎がいる）

名は『満洲日報』(昭和4年12月15日)に掲載されている(第11図)。その紙面で「開店祝い」の宣伝広告を出した店舗数は、全商店で100余を数えるうちの27店舗の名が連ねている。この数字は多数とは言えないにしても、その多くが洋装店であることには注意が求められる。連鎖街の商店経営者はほとんどが日本人で、その仕入れ先は日本であり、それゆえ東京や大阪の先端的流行が街並を飾っていたと想定することは間違いない。現地の中国人やロシア人がどの程度の頻度で連鎖街に足を踏み入れたのか、確証は無理だとしても、この地域には華やいだ空気が漂っていて、多様な出自を持つ人々が先端的ファッションに憧れて散策していたことは推測できる。おそらくは大連の多くの住民にとって、この上もないほどの羨望的として映っていたに違いない。

新聞紙上に登場する洋装店の広告は美麗である。なかでも頻繁に宣伝を繰り返していた洋装店のデルコは流行の最尖端のファッションをショーウィンドウに飾り、顧客の歓心を惹きつけようとしていた。この店は婦人服、ベビー服、化粧品、

さらに室内装飾品ではカーテンなどの販売を専門にしている。ならば負けじと中山婦人服店も最新の流行を披歴する。勝又洋服店は、タキシードなどイギリス紳士服に重点を置いている。柳屋洋服店はパラソル、日傘も含め幅広く商品を扱っていて、「流行の尖端を行く店」と自賛する(第12図参照)。もちろん、洋装店は連鎖街に限られていたわけではなく、市内にも多くの洋装店が開業していた。第13図に見る浪華洋行は、大連市内でも垢抜けしたファッション店であった。

連鎖街には訪問客を寄せ付ける仕掛けも備わっていた。楽しいな娯楽施設として映画館、常盤座は十分に存在感を示していた。市内には大連劇場、日活館、中央映画館、映楽館など、多数の劇場があるが、それら以外に連鎖街には昭和4年12月に常盤座が開館していた(『満洲日報』昭和4年12月29日)。最初に上映された映画は、吉川英治原作で、人気スター・嵐寛寿郎を主演とした東亜キネマ、「貝殻一平」であった。しかし、その後、この映画館は洋画を専門にし、デューマ「巖窟王」(『満洲日報』昭和5年4月17日)、あ

第11図 連鎖商店街の開業広告

出典:『満洲日報』、昭和4年12月15日。







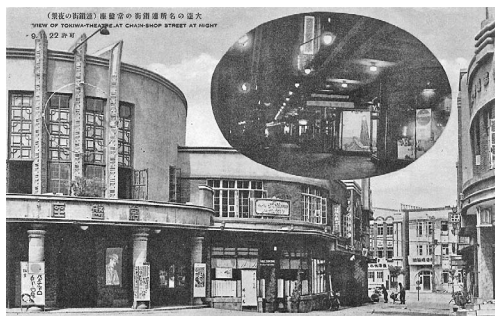
第13図 大連市内の洋装店

もちろん市内にも多くの洋装店があった。「浪華洋行」もその一つ。モダンな洋装の専門店であった(『満洲日報』、昭和8年4月8日)。

ルビンでアメリカ映画を観ていて、その時の劇場の雰囲気伝えていた。スクリーンでのキスシーンの場面にはざわめいたという与謝野の観察はおもしろいが、銀幕には漢語が使われていたことが明記されている(与謝野寛・与謝野晶子1930〈2008: 20-21〉)。

活動写真は甘々な米国物であったが、幕に書かれる支那語の言葉を面白いと思った。観客は露人よりも下流の支那人が多い。接吻の場面の多い挑発的な映画が支那の大衆に歓迎されるらしい。

アメリカ映画、たぶんハリウッド映画の内容は、どうやら満洲国民には衝撃的であって、しかも好意的に受け入れられたようだ。観客は俳優たちの発する言葉を銀幕に翻訳された漢語(「支那語」)によって理解した、と与謝野は言う。アメ



a)



b)

第14図 絵葉書 常盤座の光景

- a) 連鎖街の中には常盤座という映画館があった。  
b) 常盤座ではチャップリンのフィルムも上映されていた(『満洲日報』、昭和7年4月14日)。

リカ、あるいは西欧の映画文化は、こうして深く満洲に浸透していった。大連やハルビンなど満洲の大都市には、邦画はもちろん洋画専門の劇場も多数、開業していて、新聞の娯楽欄には上映番組が毎日、紹介されていた。当然、映画館側の収益を考えると、人口で優る満洲人をターゲットにした戦略が求められたことであろう。さらに、新聞紙上には映画時評の欄もあって解説も行き届いていた。市中には洋画専門、邦画専門の映画館が多数あり、こうして、娯楽作品としての映画は大衆の心を掴んでいた。

カフェもまた連鎖街を特徴づけていた主役である。カフェの繁盛ぶりからは、連鎖街が醸し出す風情が周囲に溶け込みながら靈気を放っていた様子が見えてくる。大連市の一角には、このように商業施設が軒を連ね、新しい文明の登場を待ち構えていた世界があった。そこでのカフェの発散するエロスの世界もまた、この時代の息吹をありのままに伝えていた。だが、それを語るには時代





a)



b)

第15図 大連市内の映画館

- a) 絵葉書、「中央映画館」の外観  
大連市内には、ほかにも日活館、永楽館、帝国館、浪速館、演芸館などがあった。
- b) 日活館では「クレオパトラ」などの洋画が上映されていた（『満洲日報』、昭和10年1月7日）。

を少し廻らねばならない。

## 2 裸踊りと文学者

大連の連鎖街で洋風化が流行していた昭和の時代、新たな都市文化として登場してきた盛り場文化は、その勢いが絶頂に達した頃、公序良俗を害するとして公安当局によって取締りの対象にされ出していた。言い換えると、カフェの発散する薫りが連鎖街には播き散らされていて、同時にエロスの雰囲気が充満していたことを意味していた。新聞紙上でもエロスを表現する記事は溢れ、その広告も眼にすることは日常茶飯事のことであった。しかも、この現象は大連市だけに特有な現象ではない。満洲でも有数な観光地であって、多くの観光客を集めてきたハルビンは、ロシア人の建設した都市として、建物は美しく飾り立てられ、そこに住むロシア人の姿態は観光客の視線を釘付けにしてしまう。生田美智子は開拓村・ロマノフ

カにおけるロシア人の農村女性を取り上げながら、ハルビンのモダンガールを紹介している。それによると、短髪のヘアースタイルで帽子を被る、「近代的でコスモポリタンので都会のシンボリックな存在」がハルビンにも登場したと指摘する（生田 2010: 25）。これに関しては、すでに紹介した第4図が参考になろう。ハルビンの歓楽街は華やかな雰囲気包まれていた。大連と同じように、ハルビンも表情豊かな都市であった。やや歴史を遡り、大正期のハルビンから、その姿を描き出してみよう。主題は当時の文豪が眼にした風物誌である。

### (1) ハルビンの裸踊り

ロシア文学に精通し、その翻訳家としても名を馳せていた文学者としての昇曙夢（本名・直隆）は多才な能力を持ち合わせていた。昇は郷土史家として故郷、奄美大島の民俗学の発展にも寄与し、『大奄美史』なる著作を残していたが、ロシア文学への情熱は晩年に至っても衰えることはなかった。昇はロシア革命の直後にソ連を訪問して、モスクワなどの世情についての観察記録も残している。その時の訪問はシベリアを経由する旅であった。その途次、昇は「シャンタン」を訪れている。シャンタンとは「レストランを兼ねた寄席」で、極東の大きな町々には存在していた、と昇は証言している。レストランとはいえ、その内部には舞台が設けられ、オペラや独唱、そして舞踊も行われていたと述べていて、昇は実際にハルビンに立ち寄った際、キタイスカヤ街の大通りから少し奥まった場所にあるシャンタンを訪れていた。そこで目撃した光景は昇にとって衝撃的であった。真夜中から朝方の4時頃まで演じられるショー、俗に言う「裸踊り」を昇は見たのであった。そのショーは若きロシア人娘たちによって演じられていた。

そのショーは深夜頃からはじまる。概要を記してみよう。夜中の一時頃になると、しだいに会場は熱気を帯びていき、舞台上で演じる踊子たちの姿態も派手さを増していく。「輕羅を透かして」、「乳房、豊満な肉、腰の曲線美」が浮き彫りになり、「仕舞にはとても見ていてゐられないやうな挑発的なもの」が演じられていく、ということ

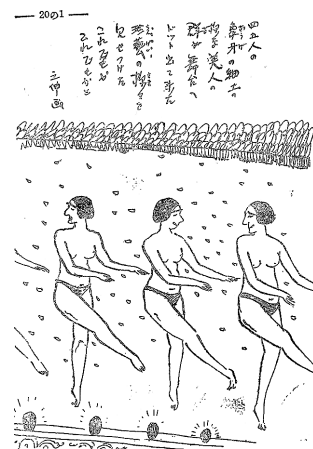
あった。演技が終われば、踊子は着替え、観衆の中に入って酌し、四時以降になって閉店後、めばしい客と二人でホテルに行くというのが、このシャンタンでの実態であった（昇 2011 〈1924〉：216-218）。

昇の目撃談が真実味を帯びているのは、それ以外にも観覧したことのある著名人がいたからである。作家の田山花袋もその一人であった。花袋は大正 13（1924）年に『満鮮の行楽』という小説を出版していて、見聞したショーをその書物のなかで書き留めている。花袋はこの裸踊りを見た時、それには失望したようだ。「評判なハダカ踊り！！——しかしあんなもの大したものぢやないね。大騒ぎするほどのことはないと思ふね」と素っ気ない。「ロシアの妓の大きいのには驚くよ。肥へた大きな奴なんだからなあ」と、体格差に劣等感を感じているような話ぶりである（田山 1924 〈1995: 177〉）。それにしても、裸踊りは巷では「評判」であったようで、その噂は世間ではそうとうに膾炙していた。そこは、満洲へ旅行する人たちにとっては、さしづめ現代風に言えば隠れた「観光スポット」であった。噂をたよりに裸踊りを観劇していた著名人は、これだけではなかった。大正・昭和期に廓清運動を主導し、娼妓解放に尽力した清沢冽もまた、ハルビンで裸踊りを見物した一人である。名高い裸踊りを見ようとして一行 23 人で連れだって、裸踊りを見に行ったことを告白している。裸踊りの行われる場所は暗い路地裏の建物で、大通りの街路から外れ、横道に入った長屋式の家屋であった。中に入ると、約 20 畳ほどの部屋の片隅にピアノが置いてある。そこで案内人に従って 6 人の踊子を指名すると、その 6 人が登場し、音楽に合わせ服を脱ぎ始めた。清沢の文章は検閲のために伏字が多く、これ以上のことは読者が判断せざるを得ないが、ここで裸体踊りを見ていたことは確かである。清沢は「かうぶしつけに見せられては、却って興味が策然としてしまふネ」と婉曲的に伝えている（清沢 1926: 165）。

その後も、ハルビンの裸踊りは旅行者の好奇の

的になっていた。「身に一布をもつけてない女達がフォックス・トロットを踊ってる」という光景が語られている（郡司 1932: 58）。こうした話題の尽きない裸踊りだが、ほかにも記録に留めていた人物がいた。田山花袋や清沢冽の知識人と同じ時期、大衆作家として人気を集めていた奥野他見男（本名：西川他見男）もハルビンの裸踊りに魅せられていた一人であった。都市の風情を題材にし、ユーモア作家として名を馳せていた西川他見男（1889-1953）は、大正から昭和にかけて多くの著作を執筆していて、滑稽譚を得意にしていた。『おへその宙返り』（1916 年、東文堂）、『おなかの逆立ち』（1916 年、泰山堂）などは若き時代の傑作で、何度も版を重ねていた実績を持っている。それ以後も多作な文筆家として名を馳せ、文壇に確固たる地位を築いてきた<sup>2)</sup>。

この西川も満洲を旅行した際、ハルビンで裸踊りを見たことを告白している。時間的前後関係で言えば田山花袋や清沢冽より早く、西川が『ハルビン夜話』と題した出版物を公刊したのは、大正 12（1923）年のことであった。この著作こそは、当時の日本人の満洲熱を煽った小説として記憶に留めておいてよい作品であって、かなりの売れ行



第 16 図 裸踊りの光景

西川他見男がハルビンで見た裸踊り。西川の弁：「四五人の象牙の細工の様な美人の群が舞台へドット出て来た。珍芸の様々を見せつけた。これでもかこれでもかと」  
出典：西川 1929: 20-1。

2) 西川（奥野）他見男については桑原恵美が研究している。滑稽・ユーモア文を得意とする西川の作品は、「事実をありのままに描いているかのような描き方をする」ことにあった（桑原 2007: 146）。

き実績を持ち、何度も版を重ねている。もしかしたら、田山や清沢も西川のア読者であったかも知れないし、ハルビンの裸踊りを見る動機付けになったのかも知れない。その裸踊りとは、西川の初版本では、歓楽郷の世界は次のように記述されている。その光景を説明してみよう。とあるカフェのなかに入ると、舞台が設置されていて、そこでダンスが見られたと言う。西川もその中に入り踊っていたが、一幕が終わって次の幕に至って西川は驚くべきものを見てしまった（第16図）、と叫ぶ（西川1929: 31-32、西川1923〈2007: 29〉）。

四五人の象牙の細工の様な美人の群れが、舞台へドッと出て来た。そして茲に筆にすべからざる珍芸の様々を見せ付けた。これでもか、これでもかと云ふ。所謂道学者に見せたら思はず眼を蓋ふものばかり。／＼然し腰部には僅かに布を纏ふてゐた。以前は全々真の裸体だった相だけど、ロシアが国亡びると同時に、このハルビンにゐる支那人が威張り出し、同時に此こんなさまを見せ付けられては、妬けて妬けて堪らず、遂に支那の警察が風俗を乱すものだと問題にした為め、布を巻く様になったものだと云ふ（西川1923: 29〈井上章一編2007〉）。

この引用文が収録されている著書、『ハルビン夜話』の初版は東京の潮文閣から大正12（1923）年に出版された<sup>3)</sup>。この書物の売行きはたいへん好調で、何度も版を重ねている。そのため、さらに版元を変え、昭和4（1929）年になって玉井清文堂からも重版として出版されている。この初版本（潮文閣版、大正12年）と玉井清文堂版（昭和4年）とを比較してみると、組版の違いこそあれども、本文自体は同じ内容である。しかしながら、決定的な相違が認められるのであって、その相違は時代相を反映していると推量できる。初版本では文中には挿絵はなく、裸踊りの挿絵は含まれていない。ところが、昭和4年版（玉井清文堂

版）には豊富なまでに多くの挿絵が掲載されていて、そのなかには、裸踊りの挿絵を見ることが出来る（第16図）。昭和4年版と大正12年版の違いについて、いささか推理を働かせて、その理由について想像をめぐらしてみよう。それには、時代背景などが大きく関わっていたと思われる。初版本は文字情報を伝達することに目標を置いていたが、想像以上に読者数を獲得したため、文字情報以外にも視覚情報を取り入れて内容の充実を図ることを思いついたのではないだろうか。さらに、もっと深く時代の流行現象を見ておく必要も感じさせる。玉井清文堂版が出版された昭和4（1929）年頃は、世間にはエロ・グロという言葉が流行していた時代である。この言葉は当時の世相を反映していて、「変態」を題材にした通俗物は一般大衆の人気を集めていた（菅野2005）。そうした世相を考えると、裸踊りの挿絵の利用は、大衆受けを狙い、エロ・グロの風潮を意識したためと思われる。流行に敏なる西川にとって、時流に便乗することは当然の成り行きだったのであろう。裸踊りの画像を挿入することで、西川の著書はいっそう大衆の心を掴んだし、多大な影響を社会に及ぼした、というわけである。

西川が見た裸踊りは、田山花袋や清沢冽がみたものと同じであろう。ただし、「裸踊り」に類するショーは東京・浅草でも行われていた記録がある。昭和初期、浅草の「電気館」ではアトラクションとしてジャズの演奏とともにレビューも行われていた。ところが、ある時は手違いから「ブローースと乳隠し」だけでフラダンスを踊ってしまったといい、それがかえって観衆の喝采を浴びたと言う（内山1967: 141）。ただし、浅草と満洲では違いがあり、満洲の場合、露出度はきわめて高い。加えて白人のロシア人ということで人々の関心を惹きつけたようだ。満洲に行けば裸踊りが見られるという噂が広がるなか、こうした理由でツーリストにとって人気の出し物になっていったと思われる。実際に、西川以外にも情報が寄せられていて、例えば広岡光治編『最新ハルビン案内』（昭和9年、大北新報社）にもその記述を読

3) 西川他見男『ハルビン夜話』（東京：潮文閣、1923年）の初版本は、井上章一が編集した「近代日本のセクシュアリティ 20：風俗からみるセクシュアリティ」に収録されている（井上章一編2007）。

むことができる。それによると、路地裏の秘密めいた場所で、身体を露出させて踊る演技が行われていた。こうして旅人の興味をそそる情報は広く知れ渡っていった。広岡の編集した著書はツーリストに簡便な情報を提供する冊子である。その分担執筆者の一人、浅野歳郎は「ハルビンに行ったらハダカ踊りを見て来なければ正月に餅を喰わなかったと同じだ」と聞かされていたので、満洲の地を踏むや、喜び勇んで裸踊りの情報を集めようとした（浅野 1934: 193）。その情報が容易に得やすかったのは、警察当局の取締が意外に緩かったからに違いない。しばし浅野歳郎の記述を見てみよう。浅野は現地案内人を見つけ、とある場所に連れて行ってもらった。そこは、「何だか小暗い地下室」のようであったが、内部にはやや広いホールがあった。そこにロシア娘が控えていて、飲食をねだられているうちに、「身に紅色のうす物を一枚」を巻いた別のロシア娘が出て来た。すると、その薄物を脱ぎ捨て、踊りを始めたのである。浅野の文面からすれば、ただこれだけのことだったらしい。どうも、文字通りの、単純な裸踊りの話であって、浅野はといえば、この裸踊りには醜悪な印象しか受けなかったようである。その踊りを見て、ただ「肉塊の転々する」だけで、「芸術的な美点はみじんもない」と辟易してしまっている（浅野 1934: 201）。先に引用した清沢冽が見た世界は、これと大同小異なのであろう。清沢が、「かうぶしつけに見せられては、却って興味が策然としてしまふネ」と嘆息した状況が、そこには再現していたようだ。

芸術的雰囲気さえ感じさせない裸踊りに、おそらく田山花袋もまた、ため息をついたことであろう。だが、昭和期になると、こうしたエロスを発散させた、言ってみればアウトロー的世界の興行に対しては公安当局の監視が及ぶようになる。『満洲日報』（昭和4年8月31日）は「裸体ダンスは罷りならぬ」という警察の通達を報道していた。その理由は「風紀紊乱」を取締るためである。ハルビンで裸体を露出したり、深夜12時以降の出し物は厳しく制約されていたのは、これ以降のことである。もっとも、この取締がどこまで厳密に実施されたか、実情は分からない。満洲国建国直後までは、治安活動の中心は中華民国に

委ねられていて、日本の公安権力のような厳しい取締りは行われていなかった。昭和4年の通達以降でも、先の浅野の見聞記がもたらされたのも、そのためと思われる。しかしながら、日中戦争の激化に伴い、また奢侈品の禁制などの政策が実施される時代になると、終焉を余儀なくさせられた。「裸体踊りとキャバレーの歓楽郷としてのハルビン」は「軍国主義の時代風潮に合わなくなり、葬り去ら」（生田 2014: 17）れるという結果が待っていた。

### 3 エロスの時代：歓楽街に遊ぶ

裸踊りといかなくとも、享楽気分の拵りは昭和初頭の満洲には見出すことができる。大都市で



第17図 絵葉書：ロシア人のキャバレー  
a)、b)ともに日本人「お上りさん」を滑稽に描いている。

はカフェやキャバレーがおおいに繁昌していたし、とりわけハルビンのキャバレーではロシア人の活動によって芸術的雰囲気がおおいに盛り上がっていた時代であった。

### (1) ハルビンのキャバレー

満洲での歓楽郷は底知れない拵がりをもって、訪問客に対しては様々な戦術を仕組んでくる。レビューを演じる芸術的なキャバレーからエロティズムを発散させるカフェまで多彩である。先に挙げた裸踊りとはいささか雰囲気が異なっており、昭和10年頃のハルビンを描いた資料を見ると、ロシア人のキャバレーには芸術性を打ち出そうとする姿もまた垣間見られる。そこでは観光客を呼びこもうとする戦略が明確である。第17図は新京（現・長春）のキャバレーを舞台にしている、近代的なロシア人ダンサーと田舎出身の日本人「お上りさん」が対比して描かれた絵葉書である。この写真画像を見る限りでは、ロシア芸術の香りを漂わせたキャバレーに対し、それと対照的に描かれた日本人は滑稽な役まわりで描かれている。

ロシア人が演じる歌舞は種々の旅行案内書に登場してくる。今枝折夫（1935）は、『満洲異聞』のなかでハルビン情緒の世界を描写しているし、ス波雪夫も、芸術性に富んだ歌舞を演じるキャバ

レーとして、ファンタジアとカジノとの二カ所を紹介している（ス波 1936: 43-44）。そのキャバレーの舞台ではジャズの音を聞きながら、歌と踊りを鑑賞することができる。ファンタジアの画像は、第18図に見ることができる。「芸術的キャバレー」を謳うファンタジアでは、舞台での歌舞が演じられるように、宝塚、あるいは日劇のステージを思い起こさせる豪華なプログラムを組んでいて、名だたるハルビンの歓楽街を飾る観光名所としての存在意義を見せつけていた。いわく、

「ファンタジアは極東第一のキャバレー」、  
「ファンタジアは観光客の懐かしき場所」、  
「ファンタジアは華美な五百名を容る広い歓楽郷」

と自ら褒めたたえる言葉を投げかけ、さらに続けて、こうも言う。すなわち、「華麗な演芸プログラム」、「舞姫十名の華麗なバレエ」、「最新欧米式プログラムと立派なジャズバンド」、「安価！」と（広岡 1934: 差込画像）。

このファンタジアは日本人がよく訪れるキャバレーのようである。音楽家の村松道爾もここを訪れていて、その時の感想を村松はこう述べている（村松 1940: 282）。



第18図 ハルビンのキャバレー、ファンタジア  
極東一を誇る、芸術的キャバレーが第一の宣伝材料だった。  
出典：広岡 1934: 190



第19図 ハルビンのキャバレー、カジノ  
ジャズバンドを揃え、レビュー鑑賞、ダンスもできる。写真では和服姿のロシア人もいたようである。  
出典：広岡 1934: 210。

バンドも立派なものだし舞台があつて、曲芸だの踊りなぞが交代にある。中央はダンス場で、飲んだり食ったり、踊ったり見たり出来る日本に見られない歓楽郷である。客はほとんど日本人である。殊に若い男女の多いのに驚いた。

他方のカジノも負けていない。「ハルビンの名優毎日出演」と言い、こう訴えかける（広岡 1934: 210）。

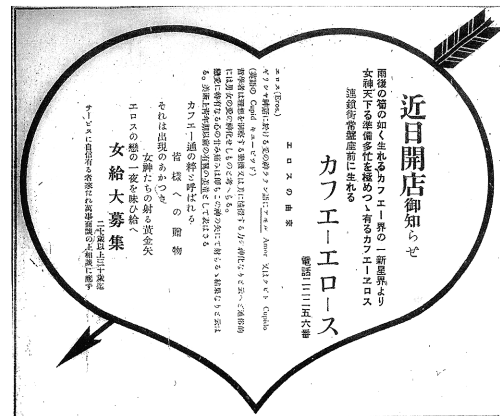
美しい舞姫十名の芸術的演出とレビュー/ 名手揃ひのジャズバンド。ダンス場は軽快なステップの寄木細工。料理は一流のコックの手で。酒は有ゆる諸国の美酒。

ジャズとダンス、魅惑的な歓楽の都市。ツーリストを招く題材は豊富であつた。ハルビンの夜は

消費生活を享受する都市でもあつた。

## (2) カフェ街の状況

満洲でのキャバレーやカフェがいつ頃から生ま



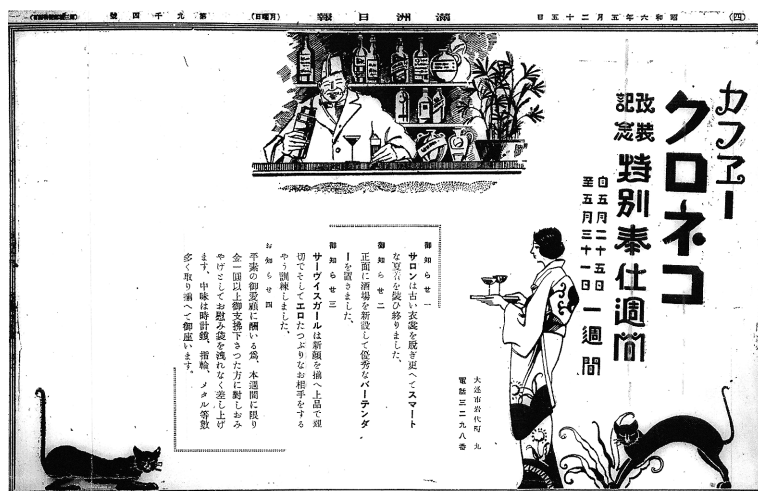
第 20 図 カフェ・エロスの開店広告

出典：『満洲日報』、昭和 6 年 8 月 26 日。

第 2 表 大連市連鎖街のカフェ開店（昭和 6 年時）

店名	宣伝（うたい）文言	所在地	開業日
トリオ	断然尖端を行く／女給サービス百パーセント	連鎖街本町通	昭和 6 年 4 月 23 日
ワカナ	本カフェー独特／絶対的タッチ・サービス	連鎖街心斎橋通	4 月 18 日
アカダマ	ダイレンカフェー界の最先端——アカダマ／設備 No.1 上品 No.1 サービス No.1 美人揃 No.1	連鎖街銀座通	7 月 18 日
タマミ	追従を許さぬ特徴を持った此の近代的ホールで洗練されたサービスはキット皆様方のお心にピッタリと喰ひ入ります	連鎖街京極通	8 月 23 日
エロス	雨後の筈の如く生まれるカフェー界の一新星界より女神天下る準備多忙を極めつゝ有るカフェーエロス連鎖街常盤座前に生れる	連鎖街常盤座前	8 月 26 日
ヨーロー	広々としたホール、豪華な椅子、美しい人たちのサービスで一夜をブル気分でお過ごし下さいませやう……	連鎖街常盤座前	8 月 26 日
ルナ		連鎖街商店川端	8 月 27 日
京極		連鎖街常盤座前	
ミス・ダイレン	国際都市に新しく生まれたミス・ダイレンは あまたの美女をかかへ、一流の調練を以って、あなたにサービスします／モダンな設備に、世界一流の飲物 近代人の慰安はミス・ダイレンにて 100 パーセント求められます	連鎖街満電バス前	9 月 12 日
連鎖会館	お待兼ねの連鎖会館 愈々本日より開店いたしました	連鎖街心斎橋通	11 月 28 日
サロン・ハル	大連一の大ホールと豪華な設備／自慢の郷土料理と多数の紅群／新しくサロン・ハルの陣営は揃ひました。	連鎖街心斎橋通	11 月 30 日
チャールストン	皆様のカフェーとして新しく生まれました 大連で唯一を誇る内部の設備女給は中等以上の教養ある美人揃ひ	常盤橋停留所そば	12 月 25 日

いずれの情報も『満洲日報』（右欄の日付）の記事によって作成した。宣伝文言がなく、店名のみの記載の場合はそのままにしておいた。



第21図 カフェ・クロネコの広告

出典：『満洲日報』、昭和6年5月25日。

れたのか、資料的な制約があって正確には言えない。しかし、連鎖街商店街が運営され始めた昭和5年前後は大連市では雨後の筍のように数多のカフェが出現していた。そのカフェの多くは日本人の経営で、あるいはその資本で成立していて、大阪や東京の経営方針を踏襲していた。先に紹介した「カフェ・ワカナ」がそうであるが、それ以外にも何軒ものカフェが昭和6年に相次いで生まれている。第2表は『満洲日報』に掲載された開店広告を基にして作成した一覧表であって、ここにも連鎖街が消費都市としての代表的な姿を形作っていたことが読み取れる。この宣伝広告で注目を引くのは、8月26日の「カフェ・エロス」で、その店名からして時代の流行を追う姿勢が顕著に看取れる。「エロス」の宣伝文をここでも詳しく検討してみよう。その一部は第2表に例示しておいたが、その宣伝文に引き続いて、さらに細やかな言い回しでの文章が続いている。まず第一にギリシャ神話を取り上げ「エロスの由来」を説き明かす（第20図）。これに次いで、甘いささやきの声が投げかけられる。

「カフェー通の粹と呼ばれる／皆様方への贈り物／

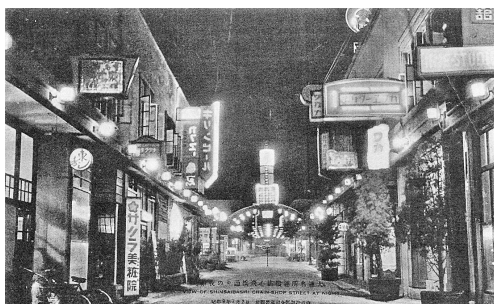
それは出現のあかつき／女神たちの射る黄金矢

エロスの恋の一夜を味ひ給へ

ありふれた単語の組み合わせで、この言葉を聞いただけでは心ときめく人はいないだろうが、このエロスという命名自体がまさに最先端の流行を表現していたのである。カフェの乱立は、まさしく一つの時代の到来を物語っていた。この年に開店したカフェは連鎖街だけではない。市内の主だった繁華街の随所でも多くの店開きが確認できる。この時期とばかり、以前から開店していたカフェも、流行に遅れまいとしたのか、改装して営業に励み出していた。第21図は、大連市内の別の場所で開店したカフェ、「クロネコ」の広告である。改装記念として『満洲日報』紙の4面に、これ見よがしとばかり大きく紙面を割いて掲載されたクロネコの広告は、この時代の世相を表している。この図版の和服の女性は「サービスガール」なのであろうか。説明書には、こう書かれている（『満洲日報』、昭和6年5月25日）。

サービスガールは新顔を揃へ上品で親切でそしてエロたっぷりなお相手をするやう訓練しました。

「エロたっぷり」とは、時代の潮流を巧みに表現した言葉である。当時、大連市に相次いで開店したカフェの多くは、例えば「断然尖端に行く／女給サービス百パーセント」（『満洲日報』、昭和6年4月23日）と言うように、大阪や東京の繁



第 22 図 絵葉書：夜の連鎖街

この街路は心斎橋通りと名付けられ、右側建物にカフェ「ワカナ」の看板が見える。



第 24 図 カフェ「ワカナ」の一周年記念の宣伝広告  
一周年記念の際、ワカナはエロティックな広告を出していた。

出典：『満洲日報』、昭和 7 年 4 月 20 日。



第 23 図 カフェ「ワカナ」の開店広告

出典：『満洲日報』、昭和 6 年 4 月 18 日。

華街で見たのと類似した殺し文句を打ち出している。「女給サービス」とは、言うまでもなく、「カフェ・クロネコ」で示された「エロ」を含意していると考えて間違いない。この時代の世相を説き明かす鍵語彙は、やはりエロティズムであった。

### (3) エロスの時代

大正末から昭和にかけて満洲の大都市、ハルビンや大連ではカフェが相次いで開店している。昭和 4 年に建設された大連市の連鎖街でもいくつかのカフェが開店していて、それらの客寄せ戦術は時代を反映していた。

カフェ・ワカナは、来店者には高額な景品を提供するという宣伝のもとで、昭和 6 年 4 月 18 日に開店した。この時の開店広告は、和服女性を登場させ、古風な日本への憧憬を煽りながらも、その裏で正反対の仕掛けを組み込んでいた。第 23

図は、その「開店御挨拶」である（『満洲日報』昭和 6 年 4 月 18）。それによると、来店客へのサービス品として、福引景品の一等にプラチナ腕時計を贈呈、と気前が良すぎる話が出ている。もちろん、高級品で来客の歓心を買う、客を呼び込むための戦術でしかない。しかし、このカフェの「営業方針」は別のところにあった。それは、「本カフェー独特/ 絶対的なタッチサービス！」という表現に隠されていた。まさしく、この表現は流行中のエロ・グロ・ナンセンスの大合唱に呼応している。この「絶対的なタッチサービス」とは何であろうか。ほぼ一か月後に、このカフェは再び新聞に登場する。しかし、それは警察関係の取調を伝える記事であった。「エロ・エプロンにお目玉/ ワカナのサービス睨まる」という見出しで始まる記事は、当時の世相に深く関係していた。警察の取締の理由は、女給のエプロンの下部に赤糸で「？」を括りつけ、客席に侍りながら接待を行っていた、という嫌疑である（『満洲日報』、昭和 6 年 5 月 14 日）。このエロ行為に警察は神経を尖らせていて、女給が風紀を乱しているという理由をつけ、ワカナに対して営業停止処分を科している。ワカナへはこれで 4 回目の警告になったというから（『満洲日報』、昭和 6 年 11 月 14 日）、そのエロ・サービスは常習的だった。

とはいっても、ワカナ側は緊張下にあった満洲の政治環境に無神経であったわけではない。女給を採用する際には「面接試験」を行っていて、政治環境への配慮を見せてはいた。女給採用時の「面接科目」が新聞紙上では紹介されている。そ





第25図 カフェ「東ラッキーバー」の開店披露広告  
出典：『満洲日報』、昭和7年4月27日。

れによると、「世間学」「社交話術」「国粋の礼儀」「表情」「美貌」などであった（『満洲日報』、昭和6年9月11日）。「国粋の礼儀」ということで当時の社会情勢に配慮し、営業方法に敏感に反応させていた様子はうかがわれる。だが、面接の中心は「社交話術」にあったであろうことは、件の「開店御挨拶」から、すぐに察知される。しかし、それにしても女給の面接に「五科目」の「試験」とあっては、いささか大げさすぎる感じは、しないでもない。

連鎖街の別のカフェ、「東ラッキーバー」もまた、同じ観点から興味がそそられる。開店披露の宣伝に日本舞踊を演じる和装女性の画像を掲載して（『満洲日報』、昭和7年4月27日）、奥床しさを感じさせるが（第25図）、そこにながしかの政治的戦術が隠されているのが見え隠れし、和装女性の画像は国策に順応した営業方針との関連を思い起こさせる。実際に、その意図は明瞭に営業者自身から説明されている。創業に際して、このカフェは「国際連盟脱退に処する東ラッキーバーの対策」と題した「意見書」を『満洲日報』に寄稿しているのである（『満洲日報』、昭和8年2月22日）。その記事には、確かに政治的意図が

はつきりと書き記されていて、その趣旨は「国粋を賛美せよ」という信念に訴えることにあった。「国粋」と「カフェ」の組み合わせは奇妙に見えるかもしれないが、この文脈を辿れば「洋装」を排撃せよというカフェの主張が浮んでくる。「意見書」の言葉を使えば、「女給は国粋礼儀をモットーとし和服の床しさを賛美すると共に洋装を捨て」よ、という趣旨に基づいての発案となる。「国粋的」という言葉が投げかけるメッセージは、和装の強調と表裏一体の表現であった。この記事を読み取って、林葉子はこの「意見書」が発するメッセージとして、「〈日本人〉らしさ」を確認する場、あるいは日本人としてのアイデンティティを確認する場として、カフェ・東ラッキーバーの存在意義を指摘している（林2015: 153-157）。その指摘は、それで納得できる。

しかしながら、エロスに対する配慮を過小評価するならば、林の議論はほかの重要な側面を見落としてしまう。「和風」の強調は日本らしさの回復のためではあったが、それは同時に当時の世相に色濃く浸透していた「エロス」への反発から生じたものと考えるべきであろう。「和風」を強調する背景には、「エロス」への対抗という伏線が潜んでいたと思われる<sup>4)</sup>。林はジェンダー論からのアプローチ、もしくは女性の身体に対する男の欲望の発露と解釈する立場だが、当時の世相を考えれば、エリート層にとってはセクシャリティの露出は嫌悪すべき事柄であって、卑猥な行為にほかならず、それゆえ「浄化」すべき問題であった。林葉の議論はこの旨の認識が不足している。この問題は次節で詳述したいが、あらかじめ要点を次のように述べておく。

その重要な論点は、このカフェが国粋意識を強調するにしても、同時にエロティズムに批判の目を向けていた事実を無視しては時代の流れを捉え

4) 『満洲日報』（昭和8年2月22日）は「国際連盟脱退に処する東ラッキーバーの対策」という政治声明を発表している。それには連盟脱退を支持する主張が込められていた。しかしながら、その声明文は、「国粋を賛美せよ」という信条とともに「ダンス用レコードを排せ」という二本柱で組み立てられているのが分かる。「ダンス用レコード」とは何かこの声明には触れられていない。しかし、カフェを含め、当時の日本で唄われていた人気レコードには「女給」という歌曲があったことを忘れてはいけない。その歌詞は愛欲を主題にしている、歌詞の原作になった物語は広津和郎の小説『女給』であり、その小説は「小夜子」と呼ばれる女給を主人公にした物語である。『女給』は映画化され、台湾、満洲を含め、日本全域で上映された人気作品であり、そこで歌われた男女の恋愛沙汰は菊池寛をも巻き込んで社会問題にもなった。そのレコードは日東蓄音機株式会社から発売されている（山路2020、2021 a）。

そこなってしまう。それを無視してしまうと、カフェで流れるエロスに満ちた歌曲、そして社交ダンスそのものをエロティックな行為とみて激しく反発していた当時の世間の潮流を見失ってしまう。結論的に言えば、ダンス排撃の動きは公共の場にエロスを持ち込むことに対する反発であり、公安権力を背景にした運動であった。エロスと公権力との確執がその背後には控えていた。その議論を進めるためには、当時のカフェに対する評判を考えておく必要がある。ただし、ここで最初に誤解がないよう、ダンスについての注釈を加えておく。ここでいうダンスとは、フォークダンス、コザックダンス、バレードダンス、いわんや盆踊りではなく、社交ダンスを指している。それは男女が対になり、しかも身体を密着させて踊るダンスである。この社交ダンスこそ、当時の風俗警察が性的秩序を混乱させる元凶として監視の眼を向け、道徳的観点から許しがたく、醇風美俗を害する存在として摘発の対象にしていたダンスなのである。

## 4 規律権力の介入

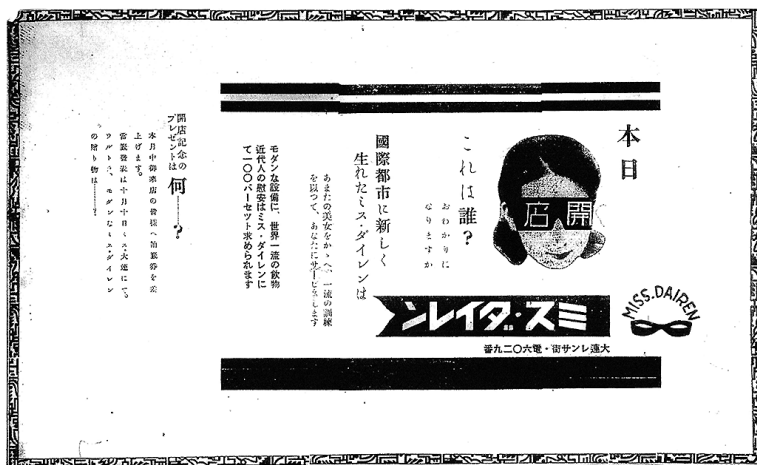
### (1) 享楽の世界と風俗警察の監視

昭和6年(1931)年の満洲事変、ついで満洲国建国以後にも長期にわたる戦乱の時代が大陸では続いたが、カフェやキャバレー、そしてダンスホールを抱える歓楽街はそうした歴史的事件にもかかわらず繁栄ぶりを謳歌していた。昭和6年は満洲の大都市、とりわけ大連市内ではカフェの新築が続いていたし、あるいは新装開店をめぐって改修する店舗も増加していて、新聞広告で確認できた店舗は40件に迫る勢いを示していた。それらのうち、ワカナ、東ラッキーバー、クロネコなどのカフェは謳い文句として「エロス」を看板に掲げていた。ここでも一例を追加をしておく。この年の9月に開店したミス・ダイレンの謳い文句は、「あまたの美女を抱え、一流の訓練を以って、あなたにサービスします。～モダンな設備に、世界一流の飲物 / 近代人の慰安はミス・ダイレンにて100パーセント求められます」(『満洲日報』、昭和6年9月12日)ということであった。そうしてみると、このカフェの基本的立場は「美

女」と「近代人の慰安」を基軸に据えていて、穏当な雰囲気を感じているように見える。その半年後、このカフェは再び広告を出す。「暗いエロ・グロの多いカフェの中に、ミス・ダイレンの明るいサービスは、断然光を放ちました」(『満洲日報』、昭和7年3月11日)と訴えていて、ミス・ダイレンは明朗だという印象を植え付けている。どうやら、その広告は他のカフェとの差異化を意図しているようであり、近辺のカフェには「暗いエロ・グロ」が多いと痛烈に批判を投げかけているようにも見える。

実際にエロ・グロという風潮は大連でも確認できる。とりわけ社交ダンスには厳しい視線が向けられ、公安警察の監視対象になっていくとともに、ダンスホールは風紀上の問題から監視の対象にされていく風潮のさなかにあった。大連市では、それまでロシア人のホールでの営業権を認めていたが、これに対して、ダンス熱の高まりに乗じて日本人からも営業権を申請する動きが活発化してきた情勢にあった。その勢いに押された公安当局は、その傾向を憂慮し、先ず関東庁での取締規則の制定に取りかかる。その規則は7月1日から実施され、ダンスホール開設については、営利を目的にしない会員組織の舞踏場に限定し、所在地などを明記した願書を提出すれば可とされた。同時に、ダンサーの採用には所轄警察署長の許可が必須、とも明記された(『満洲日報』、昭和6年6月25日)。この規則はある程度、穏やかな内容とも言える。それは、大連は海外貿易の要衝地として外国人と深い関係があることを考慮したからであった。とはいっても、許可されたのはホールでのダンスであって、カフェのステージでのダンス、とりわけ「見苦しき姿態」のダンスは厳禁とされた。その「見苦しきダンス」とは、ステージで行われる「裸踊り」に類するダンスを指すと考えて間違いがないであろうが、もっと一般的にはカフェで見られたダンス、すなわちジャズの音に合わせて踊る社交ダンスも標的にしていたはずである。

カフェの営業許可の条件は厳しかった。それは、テーブルの配置など細かい規定を設け、過度の飲酒提供を諫め、同一テーブルで接待する女給たちはテーブル二脚につき一人に制限することな



a)



b)

第26図 カフェ「ミス・ダイレン」の開店広告

- a) 開店広告ではモダンぶりを謳っている。  
出典：『満洲日報』、昭和6年9月12日。  
b) 「明るいサービス」が基本と、掲げている。  
出典：『満洲日報』、昭和7年3月11日。

ど、厳しい条件をつけての許可であった。しかも、カフェ内でのダンスは「絶対禁止」という触れ込みであった（『満洲日報』、昭和6年6月22日）。このような禁制は大阪や東京などのカフェ規制を準用したもので、公安当局の厳しい管理は、徹底的にエロ撲滅へと進んでいく方向性を暗示していた。同時に、学生のカフェへの出入りも禁止されていく。これも、大阪や東京での規制を準用した結果である。

この厳しい規制は連鎖街にも適応されていく。当時、連鎖街には10軒以上のカフェがひしめくほどの盛況ぶりであったが、警察当局は無認可女給の調査を始めたところ、57人の女給が無届のままであったと公表している（『満洲日報』、昭和6年7月10日）。その後も警察の取締は続く。ステージ付カフェでの社交ダンスの禁止を定めたほか、女給に芸妓・酌婦、舞子に類似した所作を禁じるなど、エロ対策に厳しい態度で臨むことになる（『満洲日報』、昭和6年12月15日）。

## (2) エロスと規律権力

昭和初期の満洲ではエロスの世界が華々しくその姿を現わし、その享樂の風潮が昂じた一方、その傾向への反発が同時に巻き起こったのも満洲での現実であった。その反発する運動、すなわちエロス排撃運動は各方面から起こっている。実験国家としての満洲には、建国時から「五族協和」「王道楽土」という政治理念が理想的な国家目標として唱導されていたので、醇風美俗に背反する存在としてのエロティズムは排撃運動の対象とされたのである。かくして、エロスに満ちた遊樂施設としてのカフェは忌避の対象とみなされた。エロスの世界とは、尊崇すべき国家理念から逸脱したものにほかならず、あたかも淫洞邪教を宿するような世界でしかなかった。それだから、打つべき対策としては、その世界の浄化をしなければならなかったのである。

この国家理念からの逸脱は公安警察の取締の対象であったが、それよりもいっそう効果的な対策

は「下から」の運動を通して実行することに求められた。この国家理念をもっとも深く体得した勢力は学生を中心とした青年層であった。国家は大学教育や社会活動などを通して学生に規律・訓練を求めるが、それを受け止め、血肉化させ、社会的行為の主体として動員するにあたって学生はまったくの適任者であった。エロスによって汚された世界を浄化していくという風潮に対して学生は忠実な信奉者になり、自発的に実践していくべきだという意識が生み出されていった。法に抵触する売淫行為は警察の取締り対象であるには違いないが、学生自身が意識的に、かつ率先して社会環境を整えるべきだという考えを抱き、その国家目標を自らの体内に取り入れ、血肉化させ、実践活動を開始したのである。満洲での学生たちこそ、「規律・訓練」(フーコー 1977: 143) の体现者であった。

昭和8年からは、学生を中心とした勢力が「反ダンス運動」を展開していくようになる。時はまさに「ダンス狂時代」と呼ばれるほどの勢いで満洲ではダンスが流行し、ダンスホールの設置が渴望されていた時代であった。その反対に、その動きに反発する運動も沸き上がっていった時代でもあった。例えば、満洲法政学院の学生を中心としたグループは「反ダンス運動」を主導したが、その勢力が政治的発言力を持つに至ると、その影響力が周囲にまで波及し、各地でダンス排撃運動が激しさを増していくことになった<sup>5)</sup>。ダンス反対派は各種の討論会を開催し、過激な言動を繰り返していく時代が始まった。その一端はメディアの報道に見ることができる。その報道の中心的存在は『満洲日報』であって、昭和8年2月13日の記事では「大連教化団体連盟」の主張を取り上げ、「止めよダンス=をけよ盃/ 醒めよ国民=今は非常時」という見出しを付け、その活動を紹介している。このあたりの事情は永井良和が『満洲日報』の記事をもとに紹介している(永井

1999)<sup>6)</sup>、運動の激しさを伝えている。

このような学生団体の活動は激しく、市中でピラをまいたりするほか、「日本刀で斬込め」などと過激な言動を発したりして、風俗矯正という立場からダンス反対の雄たけびを鮮明にしていっていった。さらに、この運動は各地にも飛び火していく。奉天(現: 瀋陽)では「街頭に〈ダンス爆滅〉のピラが撒かれた」と報道されるまでに過激になっていく(『満洲日報』昭和8年2月16日)。別の都市、安東でも同様に「ダンス排撃の声」が飛び交っていた、と伝えている(『満洲日報』昭和8年2月21日)。2月22日に至っては「ダンス排撃学生連盟」主催によって「ダンス排撃演説会」が開催されている。この演説会の趣旨は「満洲浄化」を目標に据えていて、過激なスローガンが唱えられていた。いわく、「正視せよ・非常時日本/ 弾圧せよ・亡国の痴戯」と。この表現から、ダンスの位置づけが見えてくる。社交ダンスは「痴戯」なのであり、ゆえに満洲から排除し、満洲を浄化しなければならないという論理である。その過激な発言では、日本人としてのアイデンティティに訴えるというよりも、道義性を重視せよという主張が全面に出ている。この演説会の直後、安東青年同志会も声明を出し、「ダンス排撃の真意」を明かしている。それは、ダンス一般を目標にしたものではなく、「社交ダンス」を対象にしたものだったという弁明であった。次の論点が、安東青年同志会の声明である。

大陸の同志が反対したのは現今満洲の大都市のダンスホールに行はわる、社交ダンスが余りにも野卑で廢頹<sup>マダマダ</sup>的<sup>マダマダ</sup>で皇国の善序良俗を□<sup>ウツ</sup>す虞があり既に往々その事実があるので特に此点を痛感したのである……。 (『満洲日報』、昭和8年3月7日)(一字判読不明)

この文面には、西欧の社交ダンスは一男一女が

5) 満洲国では建国大学が学術と教育の中心的役割を担っていたが、それ以外にも「新京法政大学」、「奉天農業大学」、「哈爾濱工業大学」、「新京医科大学」が知られている(宮沢 1997: 287)。しかし、この運動を担った学生が日本人かどうか、そこまでは情報が無い。

6) 永井良和は関西大学経済・政治研究所を拠点として、研究プロジェクトを組み、その成果の一環として『植民地都市の社交ダンス(資料集): 大連での勃興期を中心に』という報告書を出版している。その著作の中には、『満洲日報』の記事を始めとした基礎資料が網羅されている。

対をなして相抱擁するもので、西欧の個人主義に根差すから反対だとする言説が続いている。この意味不明の声明文は、どうやら「東洋的民衆舞踊」とは相容れないから反対である、と言いたげである。東洋の舞踊とは、おそらく日本の盆踊りのような形態を指しているのだろう。あるいは阿波踊りのような民俗舞踊なのかも知れない。いずれにしても、公安当局を含め、秩序維持派が問題視するのは、日本人のアイデンティティに抵触するというよりも、あくまでも「痴戯」の撲滅であって、「善序良俗」を守り、社会の「浄化」を求めたからにはかならない。満洲国という道義国家建設の建前上、言葉だけの発話の問題ではなく、社会運動という過激な行動によってエロスの浄化が叫ばれたのである。

ここまでのところ、ダンスをめぐる議論で性規範をめぐる対立の様相を論じてきた。社交ダンスをめぐる公安関係者、またその同調者の言動に注意を払ってきた。この時期の公安当局による取締りの関心は、毎日のように新聞の社会面に繰り返し報道されている記事を読むと、主に「風俗」関係にあったようだ。それだから対象はダンスホールだけではなく、カフェやキャバレーにも及んでいた。カフェのなかには大音量でジャズを奏で、その一画で男女が相抱擁して行う社交ダンスも行われていた。公安関係の立場からすれば、そうした社交ダンスは卑猥な行為であって、公序良俗を攪乱する温床とされ、監視の眼が向けられたのであった。再度、強調して言えば、この時代、しきりに唱導されていた言葉は「浄化」であった。「ダンスホール浄化、紊れる風紀に大鉄槌」（『満洲日報』、昭和10年4月21日）という見出し記事は、こうした事態への憂いを行政当局者が抱いていたことを感じさせる。

## 5 贅沢品禁止令と寂れゆく歓楽街

昭和15年になると、カフェや一連の歓楽世界には、さらに大きな危機的状態が訪れていく。日本で贅沢品排撃を目標にした法令、「奢侈品等

製造販売禁止令」（七・七奢侈禁止令）」が制定されたのは昭和15年であった。この法令は、台湾とともに、満洲でも適用され、日常生活に大きな影響を与えてしまった。むろん、この直前から満洲でも日常的な享楽的行為は規制の対象にされ、取締りの対象になっていた。あくどい広告のネオンサインが槍玉にあげられたし、カフェ街から流れ出るジャズの大きな音色も、さらには女給の発する嬌声もまた、騒音防止の理由で規制の対象になった（『満洲日日新報』、昭和14年8月5日）。歓楽街は窮地に追い込まれようとしていた。また、戦時体制を維持するため、住民には徹底的に節約を求め、節電を呼びかけ、大連市に至ってはネオン広告塔も消えゆく運命に晒された（『満洲日日新報』、昭和15年2月7日）。贅沢品を排斥し、国民生活刷新を掲げる日本政府の方針は、満洲でも厳格に実行された。

この禁忌にまともに影響を受けたのは、贅沢と歓楽を営業の基本据えたカフェやダンスホールであった。関東州ではダンスホールの営業時間が短縮される状況に追い込まれたし、それに合わせてカフェやキャバレーに対する取締りが強固に打ち出されていく。まさに享楽街は冬の季節に突入したのである。ハルビンでも事情は似ていて、ロシア人経営のキャバレー、すなわちファンタジアなどの二カ所は芸術的向上の趣旨から営業を許可するも、それ以外の営業は厳しく制約された。カフェやダンスホールへの締め付けはいつそう厳しくなっていた。

公安当局は、このハルビンでの詳細な内容を公表する<sup>7)</sup>。その立案の主体は治安部警務司保安股で、新聞記事には「享楽街の新体制」と見出しを付けて報道され、「健全慰安場へ百八十度の転向」とその特徴を指摘している。「芸術の向上及び其の生活状態」を考慮してロシア人客を対象とする最小限（二カ所以内）の存続は認めるが、それ以外の施設に対しては厳しい制約が課せられた。その規則には、カフェやダンスホールなどの室内環境や営業内容に関わる項目が列挙されていた（『満洲日日新報』、昭和15年12月19日）。いく

7) 哈爾濱商工公会是、内地の「七・七禁止令」に即し、康德7（昭和15）年9月26日に、満洲国經濟部令第五十号として満洲でも厳しい内容の「奢侈品等製造販売制限ニ関スル件」が公布されたことを伝えている。内容は衣服、裝飾品などと多岐にわたるが、「料理ヲ供スル業」には別表の通り定められた（第3表）。

第3表 「ハルビン市における奢侈品統制令」

ハルビン市は昭和15年に「奢侈品等製造加工販売ニ関スル件」（經濟部令第五十号、康德7年9月26日制定）を公布した。以下は、その一部。

第三条 料理ヲ供スルヲ業トスル者ハ康德七年十月十五日以後ハ別表第二ニ掲グル料理ヲ販売スルコトヲ得ス。但シ省長又ハ警察総監ノ許可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限リニ在ラス。

別表第二

料理名	単位	価格
和洋料理（朝鮮料理ヲ含ム）		
朝食（午前零時ヨリ午前十一時迄ノ食事）	一人ニ対シ	一元五角
中食（午前十一時ヨリ午後四時迄ノ食事）	同	四円
夕食（午後四時ヨリ午前零時迄ノ食事）	同	八円
満州料理	一卓	五〇円
同	一人ニ対シ	五円

出典：著者不詳 1940『哈爾濱商工会会報』、22-2（康德7年10月25日）。

つかの重要事項を抜き出してみたい。

料を最小限度においてその割を定める。

- 一、舞踏場の経営及び舞踏手（舞踏教師を含む）は康德八年（筆者注＝昭和15年）二月末日限りこれを廃業せしむ。
- 一、哈爾濱市における特殊飲食店（筆者注＝カフェのこと）中キャバレーと称しダンスホールを設け舞踏をなすを容認しつつ、あるものに就ては康德八年一月限りそのホールを撤去せしめ舞踏を禁止する。
- 一、特殊飲食店の営業時間は午後十一時、飲食店に付いては午後十二時閉店とす。
- 一、自肅哀悼日又はこれに準ずる日は料理屋、特殊飲食店は休業し飲食店及び宿屋に付いては酒類の販売を禁止す。
- 一、特殊飲食店における卑猥頹廢の歌舞音曲ならびに狂騒的ジャズは禁止。
- 一、特殊飲食店等のネオンは□□を表示するもの、外はこれを認めざることとし、有色室内燈は之を禁止する。
- 一、料理屋、特殊飲食店及び遊技場については学生の入場を禁止せしむる。

さらに続けて、カフェの営業について、このようにも縛りを付け加えている。

- 一、料理屋、特殊飲食店、飲食店及び宿屋等におけるチップ制度を廃止しサービス

東京や大阪と同じように、満洲でも日中戦争の激化に伴い贅沢な営みに対しての自重が求められ、節酒が奨励され、歓楽街にはお灸がすえられていった。ネオン広告塔も次第に消えていった。多くのダンスホールも閉鎖され、世の中から享楽という言葉自体が消えようとしていた。こうしてエロスへの衝動が抑制されていく時代に突入したのである。カフェの賑わいも失われていった。規律権力は、初期においては学生たちによる自発的運動が中心になって実行され、エロスの排撃と社会の浄化を求めての運動として燃えあがった。その動きは時代が進むにつれ、さらに深く進行し、ついには全面的に国家の主導による規制に至ったのである。

#### 引用文献

- 浅野歳郎 1934「ハダカ踊りを見る」、広岡光治編『最新ハルビン案内』、ハルビン：大北新報社。
- 生田美智子 2010「満洲の亡命ロシア女性の表象：着衣と裸体」『セーヴェル』26: 19-33。
- 2014「ハルビンにおけるロシア人風俗女性」『セーヴェル』30: 5-19。
- 生田美智子編 2015『女たちの満洲：多民族空間を生きて』、吹田市：大阪大学出版会。
- 井上謙三郎編 1936『大連市史』、大連：大連市役所。
- 井上章一編 2007『近代日本のセクシュアリティ 20：風俗からみるセクシュアリティ』、東京：ゆまに書

房。

今枝折夫 1935 『満洲異聞』、撫順：月刊満洲社。

内山惣一郎 1967 『浅草オペラの生活：明治・大正から昭和への日本歌劇の歩み』、東京：雄山閣。

菅野聡美 2005 『〈変態〉の時代』、東京：講談社。

貴志俊彦 2010 『満洲国のビジュアル・メディア：ポスター、絵葉書、切手』、東京：吉川弘文館。

清沢冽 1926 『モダンガール』、東京：金星堂。

桑原恵美 2007 「奥野他見男著作目録稿：奥野他見男研究に向けて」『日本大学大学院日本文学論叢』、7: 145-154。

郡司次郎正 1932 『ハルビン女』、東京：雄文閣。

杉山春 1996 『満洲女塾』、東京：新潮社。

斯波雪夫 1936 『国際情緒、哈爾濱物語』、東京：東亜書房。

清水正巳編 1929 『大連新名所 連鎖商店御案内』、大連：大連連鎖商店事務所。

田山花袋 1924 『満鮮の行楽』、東京：大阪屋号書店〈1995『定本花袋全集』28巻：177、京都：臨川書店〉。

出井盛之 1942 『関東州に於ける営業分布に関する調査』(折込図表)、大連：大連商工会議所。

永井良和 1999 『植民地都市の社交ダンス(資料集)：大連での勃興期を中心に』、吹田市：関西大学経済・政治研究所。

夏目漱石(藤井淑貞編) 2016 『満韓とところどころ』、(『漱石紀行文集』)、東京：岩波書店、所収。

成富勇 1944 『最新 大連番地入案内』(折込地図)、大連：大陸出版社。

西川他見男 1923 『ハルビン夜話』、東京：潮文閣、(井上章一編 2007 『近代日本のセクシュアリティ：風俗からみるセクシュアリティ』20、東京：ゆまに書房)。

———1929 『ハルビン夜話』、東京：玉井清文堂。

昇曙夢(直隆) 2011 (1924) 『赤露見たまゝの記』(新ロシア・パンフレット第一編、新潮社)、東京：ク

レス出版。

秦源治・劉健輝・仲万美子 2018 『大連とところどころ：画像でたどる帝国のフロンティア』、京都：晃洋書房。

林葉子 2015 「『満洲日報』にみる〈踊る女〉：満洲国建国とモダンガール」、生田美智子編『わたしの満洲：多民族空間を生きて』、pp 142-158、吹田市：大阪大学出版会。

広岡光治 1934 『最新ハルビン案内』、ハルビン：大北新報社。

フーコー、M.(田村俣訳) 1977 『監獄の誕生：監視と処罰』、東京：新潮社。

宮沢恵理子 1997 『建国大学と民族協和』、東京：風間書房。

村松道弥 1940 「満洲旅行通信(3)」『音楽新聞』283: 280-282。

山路勝彦 2020 「美人座物語：近代日本のカフェ文化(1)」『関西学院大学社会学部紀要』135: 21-56。

———2021 a 「女給が輝いていた昭和：近代日本のカフェ文化(2)」『関西学院大学社会学部紀要』136: 29-53。

———2021 b 「昭和の台湾(1)－洋装とファッション：近代日本のカフェ文化(3)」『関西学院大学社会学部紀要』137: 29-57。

———2022 「昭和の台湾(2)－近代化と植民地、消費文化と歓楽街の生成：近代日本のカフェ文化(4)」『関西学院大学社会学部紀要』138: 37-79。

山室信一 1993 『キメラ：満洲国の肖像』、東京：中央公論社。

与謝野寛・与謝野晶子 1930 『満蒙遊記』、東京：大阪屋号書店、(2008『鉄幹晶子全集』26、東京：勉誠出版)

渡辺昭夫 2001 「連鎖街と商店街：徳州写真で見る大連」『the 座』43: 18-19。

著者不詳 1938 『大連案内図』、大連：みやげものや。

著者不詳 1940 『哈爾濱商工会会報』、22-2。

## 補遺 ハルビンの映画館（パンフレット）

与謝野晶子と鉄幹がハルビンで映画鑑賞を楽しんでいたことは、すでに述べた（54 ページ参照）。残念ながら、そのアメリカ映画のタイトルは記されていないが、文人の観察記録として貴重である。このハルビンには多くの映画館があって、欧米作品を上映する「ロシア・キネマ館」、それに加えて「支那キネマ館」と「日本キネマ館」がある。このうち、「ロシア・キネマ館」は、おおむねロシア人を顧客とする劇場で、パラス、ギガント、カピトールなど8館が名を連ねていた（広岡：1934:146-148）。このカピトール（キャピトール）は、毎週のように「キャピトルニュース」というパンフレットを発行し、上映映画の予告をしていた。

康德4（1937）年4月に発行された「No.12 キャピトルニュース」というパンフレットは、当時の満洲における映画事情を知るうえで参考になる。それによると、4月30日からアメリカ映画

の「ロミオとジュリエット」の上映予告が掲載されている。「ロミオとジュリエット」は、誰でもが知るシェークスピアの大作である。パンフレットには、その映画は1936年8月にブロードウェイで封切された、とある。そうすると、わずか半年後には満洲にもたらされたことになる。因みに大阪松竹座では1937年5月20日封切である（『大阪朝日新聞』、昭和12年5月19日）。

映画のパンフレットは愛好者にとって貴重な情報源であり、戦前から広く流通していたが、興味深いことと言えば、ハルビンのキャピトル館では、内容の解説に日本語、ロシア語、中国語、と三か国語を用意していたことである。多民族社会という状況から、多くの方面から観客動員の増加を求める戦略には違いないが、それはまた各方面からアメリカ映画への期待が高まっていた、ということなのであろう。アメリカ映画という、近代の消費社会を支える娯楽産業がハルビンにも現れたわけである。ここに紹介するパンフレットは、そうした国際都市としてのハルビンの姿を浮き上がらせてくれる。



a) パンフレットの表紙。



三十三

ストロ・ゴールドサイン (日本版)

ロニオとジエリエット

演 起 日 三 十 四 月 年 四 德 康

# 情 叔 本 事

劇中人：

薛 愛 烈……………諾 列 特  
賀 爾 德……………羅 米 爾

中世紀時代，意大利之維羅那城中有二世家，一爲賀爾吉，一爲卡比由利特，世仇似深，互相往來絕。

俗云：「月老註姻緣」其事誠然，真愛有子名羅米爾，卡家有女名諾列特，男已成年，女待放，二人早已鍾情，並默許白頭偕老，並擬藉此機會轉達彼等父母之感情。二人遂請勞南斯法師主持一切。奈好事多磨，其事爲羅米爾之表兄吉巴爾特聞知，極端反對。其母即離成，勞南斯法師遂命諾列特假裝安眠藥，將其送入墓地，以便羅米爾攜其同逃。羅米爾果按法師之計畫去行，及至墓地時，羅米爾以諾列特既死，遂服毒死於女旁，諾列特見羅自殺，遂拔短刀自戕矣。

真愛與卡家經過如此之打擊，痛恨已往之無味，多年之惡夢由消除，並厚葬其子女矣。

完

## С 30-го Апреля РОМЕО И ДЖУЛЬЕТТА

Ромео - Лесли Ховард.  
Джульетта - Норма Ширер.

Две семьи, Монтекки и Капулетти, живущие в местности Верония, издавна враждовали между собой.

Но как это часто бывает, родители враждуют, а дети дружат друг с другом. Так случилось и на этот раз.

Дочь Капулетти, Джульетта, полюбила Ромео, сына Монтекки. Они страстно стремились к тому, чтобы соединить свои жизни, но родители не давали согласия на эту свадьбу, они даже строго на строго запретили вступаться молодым влюбленным.

Перед ним остался только один выход-бежать из родной страны туда, где не будет помехи их любви.

Чтобы осуществить это намерение, Джульетта обратилась к своему старому другу, Лауренсу, за советом. Последний дал ей такой совет: принять сонный порошок, чтобы она впала в летаргический сон. Окружающие подумают, что она умерла и отнесут ее в фамильный склеп, откуда ночью она сможет бежать с Ромео. Джульетта так и поступила. Но когда Ромео пришел в склеп и увидел Джульетту, лежащую в гробу, он подумал, что она на самом деле умерла, влюбленный юноша не мог перенести такой тяжелой утраты и решил тут же, около гроба возмобленной, покончить с собой, приняв яд.

В это время Джульетта очнулась от летаргического сна. Увидев мертвого Ромео, Джульетта вонзila кинжал последнего себе в сердце.

### с) ロシア語と中国語による解説。

注記) 日本語、ロシア語、漢語表記

日本語	ロシア語	漢語
ロミオ	РОМЕО	羅米爾
ジュリエット	ДЖУЛЬЕТТА	諾列特

# Eros and Regulating Power in Manchuria:

## A History of the Iconic Café in Modern Japan (5)

Katsuhiko YAMAJI

### ABSTRACT

In 1932, *Manshukoku* (or the Empire State of Manchuria) was founded under the supervision of the Japanese military. The empire maintained several ideals as national policies, e.g. “the Royal Road to Paradise” and “the Harmony of Five Peoples.”

Meanwhile, the market economy was playing an increasingly prominent role in the lives of citizens. Western styles of fashion had begun in large cities, such as Dairen and Harbin, while Hollywood movies grew in popularity. Cafés or cabarets were indispensable for pleasure in daily life. Many people grew fascinated by the social dance performed in such places. Consequently, the concept of “eros” became key at that time.

However, some students, who were devotees of government policy, resisted these contemporary fashions and cried out for the purification of society against what they saw as degenerative trends.

In this paper, an anthropological perspective is applied to analyze certain aspects of daily life, as described above in the *Manshukoku* era.

**Key Words:** Manchuria, amusement center, chain market street, social dance, café, cabaret, strip dance, eros, regulating power, purification